

ガザ空爆と 心理サポート



再びの恐怖

11月14日から21日の間、ガザは再び空爆されました。国連の統計によると、民間人の死者103人、負傷者1399人。破壊され損害の激しい家屋は450棟で、6つの病院が被災し、学校2つが完全に破壊され、22が半壊しました。またモスク2つが全壊、30が半壊し、キリスト教会も1つが半壊。2つのスポーツ施設と15の公共施設も破壊されました。

当会の2人の日本人駐在員はガザから出ていて無事でした。また現地スタッフと農業事業、ナワール児童館には直接の被害はありませんでしたが、アトファルナろう学校では窓ガラスが割れるなどの被害とナイーム校長の家が壊され、本人と家族が怪我をしました。

1300人以上が犠牲となった2008 - 2009年の大規模空爆と地上侵攻に比べれば今回の被害が小さかったことは確かですが、街の至る所に破壊の跡が残っています。崩壊しかかっている家に暮らし、雨の降るガザ地区で厳しい越冬を強いられている人たちがいます。

今回のイスラエルによる空爆は、爆撃対象が三段階に変わっていったと言われ、最初は農地や空き地など

の何もないスペース、次には内務省、交通省、警察などの政府関連施設、そして最後に住宅地が爆撃されました。「地下に隠されたミサイルを破壊する」としてイスラエルが人口密集地でも空き地があれば重量爆弾で爆撃したので、どこが狙われるかわからず表を歩けない状況でした。大きなクレーターがいたる所に開いています。人々は口々に「ものすごい音と振動だった、本当に家が揺れたんだ、まるで地震のようだった」「3分間にミサイルが20発も同じ場所に撃たれていた、2キロ先の爆撃の振動が伝わってきた」など、市街地での空爆のすごさを語っています。

この爆撃体験は恐怖として深く刻まれただけでなく、まだ記憶も新しい2008 - 2009年にあった大規模空爆と地上侵攻、あるいはそれ以前の戦闘や戦争の記憶を呼び起こしました。1948年の中東戦争、いわゆる「ナクバ（破局）」と、そこで難民となり家族を亡くしたことを思い出したという年配の人もいます。古い記憶と新しい記憶が重なり、フラッシュバックと言われる状態になったためですが、そのために不安が拡大したのです。また今回は幸いにも全面停電にならず、それがかえってテレビやインターネットで凄惨な破壊と流血



の場面を見ることを可能にしたため、「テレビで爆撃の映像を見た直後に、家のそばで実際に救急車のサイレンの音がして、子どもがパニックになった」等、直接被害を受けていない人たち、特に子どもたちへの心理的な影響が心配されています。

——— 子どもの上に天井が落ちてきた

アトファルナろう学校ではガラスが割れたり、天井の一部が外れたりするなどの被害はありましたが、建物への深刻な被害はなく学校も職業訓練もすぐに再開されました。

一番大きな被害を受けたのは、校長のナイーム先生でした。停戦の数時間前に自宅が空爆の被害にあって、家の階段が被爆し、屋根裏部屋が子どもたちの上に落ちてきたのです。子どもたちは奇跡的に無事でしたが、6歳の息子さんはイスラム教徒が臨終の間際に唱える言葉を口にしたといいます。そしてそれ以来、恐怖と不眠で1カ月ほど学校に行けなくなってしまいました。

下の階にいたナイーム校長も額と頭部に怪我をし、左腕を骨折して病院に運ばれました。命に別状はありませんでしたが、大変に混み合っていた病院の処置が

いい加減だったため、縫合した傷口に破片が残っていることが分かり、傷口を開きなおして破片を取り出ししてから再び縫合するというひどい経験しました。親せきの家に移っていた校長と2週間後に会った時には、かなり精神的にまいっている様子でした。まだ休養を必要とする状態なのに、家でじっとしている方がつらいということから仕事に復帰しており、アトファルナとしてできることをしたいと話していました。アトファルナでは停戦後すぐに被害家庭への訪問や学校での心理サポートプログラムをスタートさせています。

その一環で、ソーシャルワーカーのフィラスティーンさんが家庭訪問するのに同行しました。すぐそばにミサイルが落とされて直径15m、深さ4mほどの大きなクレーターが開き、その衝撃と吹き飛んできた土砂で、訪問した家も半壊状態でした。トタンの天井が落ちて2歳半の子どもが下敷きになったそうですが、幸いにも怪我はなく救出されました。家は穴だらけで、家の中に雨よけのシートが張られています。停戦直後には大雨がふったため家財道具が濡れて乾かすのに大変だったといいます。冬は雨がたくさん降るので、再び同じ状況になるでしょう。壁には亀裂がいたるところ



に入っていて、家が崩れないように支柱をあちこちに取り付けてしのいでいるのが、地震の後を見るようでした。

一家の父親は3年前になくなっており、今は母親、祖母、叔父、そして6歳、4歳、2歳半の3人の子どもたちで暮らしています。子どもたちの2人に聴覚障害があり、アトファルナから早期介入プログラムの支援を受けています。また一番下の2歳半の女の子は脳性麻痺でもあります。もともと一家は支援に頼る生活をしてきた上に、今回の空爆でさらなる困窮の極みに立たされています。

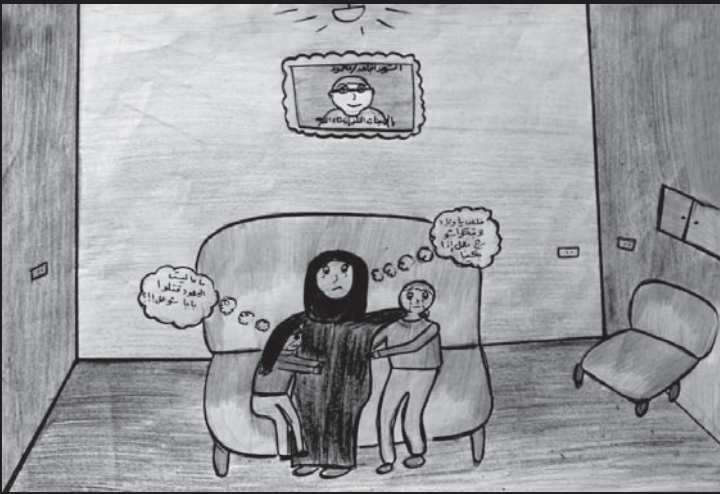
子どもたちへの心理サポート

ハンユニスのナワール児童館では、2009年の経験から停戦直後に心理サポートを開始しました。まずは、大きな声で歌ったり踊ったりしました。「トマト1キロ2シケル!!」といった八百屋さんの掛け声ごっこなどは感情やストレスの発散になります。「ダルマさんが転んだ」のようなゲームは感情の発散と収束を繰り返します。感情を出しストレスを発散させていきながら、徐々にそれをコントロールしていく訓練になっています。

それから自由に絵を描く、気持ちを話し合うなどを行いました。これも怒りやストレスを溜めないための活動です。

安心感のある狭い部屋に籠って指導員が絵本の読み聞かせをするプログラムもあります。また子どもたちが思い思いのことを話した後で、リラックスする音楽を流して7分くらい瞑想の時間を取り、一番楽しかった思い出を語り合うというプログラムもあり、どの子どもも夏に海に行って、アイスクリームやジュースを飲んだことを話していました。気分が落ち着いてきたところで、今度は鬼ごっこをします。先生が鬼になり、捕まった子どもを鬼の目を盗んで助け出すゲームです。大きな声を出して汗をかき、みな発散できていました。参加している子どもの中には、様々な問題を抱えている子どもが多いけれど、ずいぶん落ち着いてきたと指導員は言います。一人一人の子どもの様子をセンターのスタッフみんなが理解しているのに感心しました。

この時期、子どもたちの描くのは、やはり空爆の経験です。自分たちの恐怖、爆撃機、亡くなった人の様子や破壊の様子がほとんどでした。12歳の女の子は、自分の絵について「パレスチナの子どもは血の海にい



るのに誰も気づいてくれない。世界中の人はテレビを見ながらイスラエルの子どもが怪我をしているのを見て悲しんでいるのに」と話してくれました(右下の絵)。また、お母さんが泣いている子どもを抱いている絵を描いた別の12歳の子は、「テレビで、お父さんを亡くした子どもをお母さんがなぐさめているのを見て、その絵が描きたかった」と言っていました(左上の絵)。廃墟の中から立ち上がって、畑を耕す絵を描いている子どももいました(右上の絵)。

子どもの声に耳を傾ける

ナワール児童館のユニークな取り組みとして、子どもとお母さんがともに参加する家族や心理についてのシンポジウムがあります。その一つ「戦争と子どもたち」をテーマにしたシンポジウムは年末に開かれました。子どもの代表として14歳と15歳の少女二人が司会をしながら子どもたちの思いを披露しました。それから地元の心理専門家3人が子どもの意見や質問にこたえる形でお話をしました。そのあと、会場に参加したお母さんからの質問にこたえるという形式でした。戦争の後で、身体的な痛みや、不眠、おねしょ、反抗

などあるのは自然なこと、年齢によって出方が違うこと、危険な兆候とそうでない違い、感情の吐露を認めることなどが専門家から話されました。お母さんたちに提案されたのは以下のようなことです。

- 表現を大事にして、押し込めないこと。
 - 前向きな対話をしましょう。子どもたちの話を受け止めましょう。
 - 危機の時には恐れや怒りの感情や不安は自然だと説明しましょう。
 - 子どもの悪い面を批判するのではなく、良い面をほめて伸ばしましょう。
 - 状況が改善され安全になったら、一日も早く通学などの日常生活に戻しましょう。
 - 学校と家庭が協力し合い、問題がある子どもを見つけたら、必要な支援をしましょう。
- 心配な時には一日も早く専門家に相談しましょう。
- 子どもの問題に取り組むための知識を学びましょう
 - 子どもの声に耳を傾け、泣きたいときは泣かせてあげましょう。怖い時は大人と一緒に寝ましょう。



お母さんたち

「とっても良い勉強になりました。また子どもたちが思っている以上にいろんなことを考えたりしているのが分かりました。なかなか余裕がなくて子どもの話を聞けないけれど、これからは少し聞きたいと思います」
「わかっているのですが、生活に追われていて、なかなか子どもの話が聞けません」

「今日は自分たちの問題をみんなの前で子どもたちが話しました。感心しました。私たちの子どもの時よりも立派です」

会場のお母さんたちからは、おねしょがぶり返したケース、身体の痛みを訴える子、学校に行きたがらない子、勉強に集中できない子、作り話をする子などについての質問が出ていました。

こうした大人と子どもが同じ場で話をする会はガザではもちろんのこと、日本でもあまり見かけないと思います。その目的や感想などを参加した人たちに聞きました。

地元専門家(国連UNRWAスクールカウンセラー部長)のサミーラ・ムーサさん

「とても素晴らしい企画でした。ナワール児童館はだいぶ前から準備をしていて、子どもたちはみんな何度か話し合い、自分たちの意見をまとめていました。そして当日、子どもを代表する形で、2人がそれを発表したのです。この地域ではまだお母さんたちは子どもの話を聞こうとする姿勢に乏しく、ともすれば、言うことを聞かすために叩いたりします。このシンポジウムは、子どもたちについてお母さんの理解を深めるという意味で非常に重要でした」

2人の少女たち

「子どもはお母さんやお父さんに聞いてほしいことがたくさんあるのに、おうちでお話をしても聞いてもらえなかったり、怒られたりするの。怖くて言えないということを、みんなの代わりに聞きました」(マレクさん14歳)

「気持ちの問題や体の問題について、親と話をするのは恥ずかしいし、怖いという思いをみんな持っているの、みんなの代表として勇気を持って先生に聞きました。うちのお母さんも来ていたのですが」(マルさん15歳)

※

なお、ガザの様子、ナワール児童館の母体である地元NGO「CFTA」のマジダ・アルサッカさんによる戦争中のエッセーやインタビュー、ナワール児童館やアトファルナろう学校の心理サポートなどのビデオを、当会のホームページ上でご紹介していますので、あわせてご覧ください。